

一般の部

木島平村長賞

## 風呂敷弁当

福島千佳

お母さん、小学校一年生の遠足の話、してもいい？前にこの話をしたら、お母さん、すっかり忘れてて、げらっげら笑ってたよね。あの時、笑ってるお母さん見ながら、わたしも涙流して笑った。大切な思い出。

それは、長女だったわたしの、はじめての遠足。お母さんにとっては、はじめての子供へのお弁当作り。張り切ってくれたんだよね。朝起きると、台所には大きな二段弁当が風呂敷に包まれて置いてあった。

「こんなに大きなお弁当？」

「ちよつと多かったかな。おむすび六個入ってる。足りない子に分けてあげなさい」

お母さんはとても満足げで、とてもイヤとは言えず、そのずっしり重いお弁当をリュックにしまって遠足へ出かけた。

背丈は、前から二番目。痩せっぽちのわたしと、六年生のお姉ちゃんが、手をつないで遠足するという学校の決まりだった。

お昼になった。小さなレジャーシートを敷き、ズックを脱いで座る。お弁当を出そうとして、ギョツとした。他の子のお弁当は小さなタッパースイズ。風呂敷に二段弁当の子なんて誰もいない。

急に恥ずかしくなって、風呂敷弁当をリュックに戻した。「食べないの？大丈夫？」六年生のお姉ちゃんが何度も聞いてきて、とうとう担任の先生に報告した。わたしは、ただ首を横に振って、小さな声で「いらない」を繰り返した。

重くて、恥ずかしい弁当を渡したお母さんへの怒りと、一生懸命作ってくれたお弁当に手をつけなかった申し訳ない気持ち、ごちや混ぜになつて、遠足の帰り道、とうとう泣いた。先生と六年生に「具合が悪いのか」と何度も聞かれた。一刻も早く家に帰りたいかった。

帰って母がどんな対応したのか、そのお弁当を結局食べたのかは、記憶にない。でも、今ならわかる。あのお弁当の重みは、お母さんの大きな愛情だったことを。

ありがとう、あの日の思い出は宝物です。また笑おうね。